

主 題：罪人を救うために来られた主

聖書箇所：テモテへの手紙第一 1章15節

テモテへの手紙第一の1章をお開きください。今日のテキストは15節ですが、メッセージを理解するためにその前後をお読みします。1：12-17「：12 私は、私を強くしてくださる私たちの主キリスト・イエスに感謝をささげています。なぜなら、キリストは、私をこの務めに任命して、私を忠実な者と認めてくださったからです。：13 私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。：14 私たちの主の、この恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに、ますます満ちあふれるようになりました。：15 「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。：16 しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。：17 どうか、世々の王、すなわち、滅びることなく、目に見えない唯一の神に、誉れと栄えとが世々限りなくありますように。アーメン。」

15節に「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。」とあります。これは「信じる価値がある」とパウロは言うのです。何を信じるのか？イエス・キリストがこの世に来られたその目的です。クリスマスはもう皆さんご存じのようにイエス・キリストのご降誕を記念してお祝します。多くの人たちはそのことを知っているでしょう。問題は「なぜ、イエス・キリストの降誕を祝うのか？」です。何のためにイエスはこの世に来られたのか？そのことをパウロはここで私たちに教えてくれるのです。「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた」と。でも、実際にこの目的を知ったときに、多くの人たちはイエス・キリストのご降誕の目的と自分自身は無関係だと思えます。なぜなら、「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた」、私はそれには該当しない、私は罪人ではないとそのように考えている人が殆どだからです。

イエスがおられたこの当時、宗教に大変熱心だった宗教家たち、特にユダヤ教ですが、彼らはイエス・キリストのことを非難しました。イエスは罪人の仲間だとか、罪人のところに行って客となられた、つまり、罪人と言われている人たちと仲良くしているのを見てイエスを非難するのです。彼らは「私は罪人ではない。私は神の前に正しく聖い者だ。神に喜ばれる人間だ。」と信じ切っていたのです。

ルカの福音書の中にまさにそのことを教えるイエスが語られた「たとえ」があります。18章に書かれています。二人の人が祈るために宮に上ったというところです。18：10-12「：10 「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとり取税人であった。：11 パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。』」、このパリサイ人は大変傲慢です。私は正しい、でも、ここにいる取税人はそうではないと。「この取税人のようではないことを、感謝します。」と祈っています。そして、こう続けています。「：12 私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』」、このたとえをイエスは語られたのですが、この対象者はだれだったのか？だれに向かって話されたのでしょうか？聖書は教えています。9節「自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。」「私は正しい、私は神の前に聖く生きているし、神は私のことを喜んでくださっている。」と、そのように自認していた者、そのように信じ切っていた者に対して話されたのです。

そして、自分が正しいとする根拠も書かれています。良いことをしているから、どんな良いことか？「私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。」と言います。ですから、「私は正しい」と信じ切っていたこの人が何を根拠にそのように信じているのか？良いことをしているから、また、悪いとされる人との比較、それがこのような確信の根拠だったのです。「私は良いことをしています。悪いことをしていません。悪いことをしているとされている人と比べるなら私は遥かに

彼らよりもすばらしい。だから、私は神の前に正しく神に喜ばれる歩みをしている。」と言うのです。

このような考えを持っている人はたくさんいます。私もその中の一人でした。イエスを信じる前にたとえばだれかに「あなたは死んだ後どこへ行く？」と聞かれたなら、間違いなく「天国」と言いました。なぜか？悪いことをしていない、良いことをしているからと。ですから、私たちがすべきことはパウロが15節でイエスがこの世に来られた目的を「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた」と言ったとき、この「罪人」とはどのような人たちのことなのかを知ることです。

まず、広辞苑を見るとそこにはこのように定義されています。「罪人とは、罪ある人、咎人、罪人」と書かれています。そして、「罪人」とは「有罪の確定判決を受けた人、犯罪人、罪を犯した人」と。皆さん、罪人というこのようなイメージを持っていませんか？罪人とはこの社会において有罪の判決を受けた人、何かの罰則を受けた人と。この定義をみことばに当てはめるなら、あなたも私もきっとここに書かれている罪人ではないと、そのように断言するでしょう。なぜなら、私たちは法を犯して警察の厄介になったことなどないからです。ですから、もし、これがここで言われていることだとするなら、これはある特定の人に対する話であって、私たちは例外であると思うでしょう。

パウロはそういう意味でこのことば「罪人」を使ったのかどうかを考えなければなりません。もしそうなら、キリストの誕生をお祝いするのは全人類ではなくて罪人たちだけです。有罪の確定判決を受けた犯罪人、彼らだけが「イエスさま来てくださってありがとうございます。私たちに救うために来てくださってありがとうございます。」とそういうことになります。果たしてそうなのかどうか？その真理を知るためにはパウロが使ったこの「罪人」ということばの正確な意味を知ることです。パウロは何を言わんとしたのか？聖書は何を教えているのか？です。

この「罪人」ということばの意味は確かに「罪を犯す、罪がある」という意味がありますが、これは「人々が従うための基準として神が設けられたその的を外す」ということです。言い方を変えるところになります。「私たちに創造された神が私たちのために定められた歩むべき正しい道から外れてしまっている」と、神の教えに対して、神の命令に対して従って生きていないということです。神がお喜びになる生活をしていないということです。そういう人たちのことです。ですから、世の中の法律を犯したかどうかではないのです。神があなたに「こう生きなさい。こうありなさい。」という教えに対して、命令に対して的を外している、その道からずれている、その正しい道を歩んでいないと、そういう意味をもったことばなのです。

そして皆さん、あなたが確実に的外れな人生を過ごしているということを、あなたに悟らせるために神が何をくださったのか？お分かりになりますか？あなたが正しい道から外れている、あなたが神の前に罪人であることをあなたに悟らせるために神が与えてくださったもの、それは「律法」です。Iテモテ1：8をご覧ください。パウロはこのように言っています。「しかし私たちは知っています。律法は、もし次のことを知っていて正しく用いるならば、良いものです。」、律法は良いものだと言います。もし、正しく用いるなら…と。ということは、律法の教師たち、ユダヤ教の教師たちの多くはパウロがここで語ったように「律法を正しく用いていなかった」ということです。つまり、なぜ神は私たちに律法をくださったのか？その真の目的が分かっていたいかなかったのです。彼らは律法は救いを得るための手段であると考えたのです。律法によって私たちは罪を赦していただいて天国に行くことができると、そのように思ったのです。そして、彼らはこの律法を自分の力で守ることが出来ると考え、そのように教えていたのです。そして、彼らが言うことは「自分たちは間違いなくすべての律法を守っており、ゆえに、救われている」であり、そのように確信していたのです。

神がなぜ律法を私たちに与えてくれたのか？その目的が分かっていたいかなかったのです。ですから、パウロは彼らに律法が与えられたその目的を改めて教えようとするのです。1：9をご覧ください。「すなわち、律法は、正しい人のためにあるのではなく、」とあります。「正しい人」とは「神の前に罪のない正しい人」です。神の前にすべてにおいて完全に聖い人です。悪いことばを口から出す、悪いことをする、悪いことを考える、残念ながらそれが私たちです。ここで言われている正しい人とはそういうことが全くない人です。ことばにおいても行いにおいても想像においても考えにおいても思いにおいても、すべての点で神の前に聖い正しい人です。

パウロは言います。律法はそのような人のためにあるのではないと。その人たちに律法は要らないのです。では、だれに要するのか？その後書かれています。9b-10節「律法を無視する不従順な者、不敬虔な罪人、汚らしい俗物、父や母を殺す者、人を殺す者、:10 不品行な者、男色をする者、人を誘拐する者、うそをつく者、偽証をする者などのため、またそのほか健全な教えにそむく事のためにあるのです。」、ここに九つのリストが挙がっています。律法は正しくない人のために、その人たちに「あなたは神の前に罪を犯している」と、そのことを示すために与えられているのです。律法が与えられたのは、実は、あなたが神の前に罪を犯している罪人だということをあなたに悟らせるためだとパウロは言うのです。

今、話したようにここに九つのリストが出て来ます。パウロはこうして「あなたは正しいと思っているかもしれない、聖いと思っているかもしれない。天国に行けると思っているかもしれない。実は、そうではない。」とその理由を言っているのです。今から見ていきますが、最初の三つは「神に対する罪」が記されています。後の六つは「人に対する罪」です。見ていきましょう。

☆神の前に犯している罪

1. 神に対する罪

1) 不従順

「律法を無視する不従順な者」とあります。つまり、律法に従わない人のことです。神のメッセージに従わない、どんな権威にも従わない人です。これは私の人生だから好きなように生きて、私の思い通りに生きていくと、律法を無視するのです。律法は神の教えです。その教えを無視するだけでなくそれに従わないのです。新改訳聖書の訳者は敢えて「律法を無視する者」と「不従順な者」を一つにしたのです。律法を無視する者は不従順な者だからです。神に従おうとしないのです。

2) 不敬虔

「不敬虔な罪人」とあります。この「不敬虔」とは「神聖なものを敬わない、神を敬わない」ということです。神を無視して自分の肉の赴くままに生きるからです。バークレーはこのことばについて「これはその人の積極的、能動的な不信仰を現わす」と言います。つまり、だれかからそうされたのではない、自ら進んで神を敬おうとしない、そういう選択をするということです。神のことなど全く忘れて自分の肉の欲するままに、肉の赴くままに生きていこうと選択をしてそのように生きる人です。

3) 不信心

「汚らしい俗物」とあります。これは不信心の罪です。信じようとしません。 「汚らしいもの」と「俗物」と二つのことばがありますが、これも訳者は一つに記しています。見たように、律法を無視する人は不従順な人である、不敬虔な者、神を敬わない人は自分の思い通りに歩む罪人だと。そして、「汚らしいもの」は「俗物」だと言います。この「俗物」とはわかりづらいことばです。新改訳聖書の第2版、第3版はこの通りに書かれていますが、2017年版を見ると「汚れたものや俗悪なもの」と訳されています。この方が分かり易いしこれはそういう意味なのです。

「汚らしい」とは「正しいこと聖いことに対して無関心」ということ、「俗物」とは「世俗的、不信心の」ということです。この人は聖いことに全く無関心なので、神聖なものを踏みにじったり汚したり冒瀆するというのです。聖いものに対して神がお喜びになるものに対して神聖なものに対して無関心な人間はそれらを平気で踏みにじってしまいます。これが三つ目の罪として記されているのです。

これらの三つは初めに言ったように「神に対する罪」です。神の教えに従おうとしない、神に逆らって生きている人です。神を敬おうとしない、自分の肉のままに生きている人です。神聖なもの、神に対して全く関心を払おうとしない。その結果、聖い神を踏みにじってしまう、そういう歩みをしている人です。皆さん、心当たりはありませんか？神の教えよりも自分の考えを優先する、神を敬って従うのではなく、自分の肉を優先して自分のやりたいことをする、神に対して関心を持つのではなく全く無関心で、自分の肉の欲するこの世的な生き方を選択していると。

パウロはこうして、本来なら神の前を正しく歩むべき私たちはこのような歩みをしていると教えるのです。後の六つを見てください。今度は「人に対する罪」です。その前に、今私たちは三つのことを見ましたが、これらはすべて神の律法に反しているということです。なぜなら、十戒があります。出エジプト記20章に書かれています。神が命じたことは、20:3「あなたには、わたしのほかに、ほかの

神々があってはならない。」、つまり、私たちは神を愛してこの方に仕えるべき者なのに、この方を全く無視して生きることです。私たちを造ってくださった神を愛してこの方を信じてこの方に従うことは当然のことなのに、私たちはそうしたくないと言うのです。そして、見て来たように、神に従うのではなく私たちは自分の思いのままに歩んで神に対して不従順なのです。創造主なる神を敬って生きる私たちがこの方に全く敬意を払わない不敬虔なのです。この方を信じて従うべき私たちは信じようとしない、不信心なのです。こうして、神に対して律法に対して背いているのです。

2. 人に対する罪

4) 親を敬わない

四つ目に「父や母を殺す者」とあります。律法には「あなたの父と母を敬え。」(出エジプト20:12)とあります。第5番目の命令です。「殺す者」とは物騒なことばですが、パークレーはこのことばについてこのように説明しています。「このことばは感謝を失い尊敬を失い恥じらいを失っている息子や娘を表している。」と。いのちを断とうとするのだけでなく尊敬を失っているのです。なぜなら、この第5番目の律法を守らないどころか、彼らを殺害するという罪を犯しているからです。皆さんもよくご存じのように、実際に、いのちを断つだけでなく心の中で「死んでしまえ」と思うことも神の前には同じことです。

5) 殺人

「人を殺す者」とあります。説明は要りません。律法の第6番目は「殺してはならない。」(20:13)です。これを犯しているのです。

6) 性的汚れ

Iテモテ1:10に「不品行な者、男色をする者」とあります。「不品行な者」とは性的にみだらな生活をしている人です。そして、「男色をする者」とは同性愛です。これも律法の第7番目の「姦淫してはならない。」(20:14)を犯すものです。性的な聖さが命じられているのです。

7) 盗み

「人を誘拐する者」とあります。10戒の第8番目に「盗んではならない。」(20:15)という命令が出されています。人を誘拐する、人を盗むわけです。「恐らくこれは、子どもさらいの奴隷商人のことだろう」とパークレーは説明します。なぜなら、この当時、奴隷は大変高価な財産だったからです。みな同じ金額で売買されたのではないのです。高い値の付く奴隷もいたのです。とても美しい奴隷であったり、飛びぬけて教養がある者、役に立つ者、彼らには高い値が付いたのです。

悲しいことに、今でも人身売買が為されています。大変大きな罪です。人を売る人がいて、また、それを買う人がいるのです。当時は、こうして奴隷として売買するのです。そのために、もうすでに奴隷となっている人を盗むとか拉致することがあったのです。ですから、ここで「人を誘拐する者」と記されているわけです。

8) 偽り

「うそをつくる者、偽証をする者などのため、」とあります。律法の中にも「あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。」(20:16)とあります。

9) またそのほか健全な教えにそむく事

「またそのほか健全な教えにそむく事のためにあるのです。」とあります。神が教える正しいことに従って行こうとしないのです。

ですから、パウロはこうして律法がなぜ与えられたのかを明らかにしたのです。あなたは今挙げた9節、10節に該当しないか？と問うているのです。律法とはあなたの前に差し出された神の基準なのです。その基準を自分に当てはめるときに、自分は神の前にどのような存在なのかが明らかになるのです。神を無視して神に背いて生きる生き方、この世を愛してこの世に沿って生きていくこと、今、私たちが見て来たすべてに共通していることは「神よりも自分を愛している」ということです。

神の教えは、まず、神を愛すること、そして、隣人を愛すること、その後に「あなた」です。でも、自分が最も愛する存在だから自分の思い通りにならなければならない、世の中のカウンセリングはすべてその方向に流れています。皆さんご存じのように、カウンセリングをしたのは「教会」です。聖書の

知識を持っている者たちによって為されたのです。なぜなら、人間の心を直すことができるのは神だけだからです。ところが、医学の世界でもそうであるように、専門化されていて特別な教育を受けた人だけができるとしています。

聖書が教えることは「人間は生まれながらに罪人」です。そこに問題があるとします。世の中は「環境」だと言います。あなた以外のところに問題があると言うのです。だから、あなたはもっと自分を愛することをしなさいと、聖書と全く違うことを教えています。少なくとも、その時に少しだけ気分は晴れるかもしれない、あなたは被害者だ、このような環境の中でその人たちからそのような仕打ちを受けて来たから、大変な生活を今強いられていると。聖書が教えることは、確かに辛いことを経験したかもしれない。でも、その中であなたが正しい選択をするなら、それらから解放されるということです。私たちが気付くべきことは、この世の中は、そして、その背後にいる神の敵は大変悪知恵があるものだという事です。人々を神からどんどん引き離そうとします。

こうして見て来たとき、まさに、あなた自身の姿がここに記されていると、皆さん、気づきませんか？そこがスタートなのです。なぜ、律法が与えられ、なぜ、パウロがここで話しているのか？こうして、神はどのようにあなたをご覧になっているのか？そのことをあなたに示してくれたのです。人が私をどう見るか？彼らの判断は100%正しいものではありません。なぜなら、すべてを知らないからです。でも、神が下される判断は100%正しい、私たちのすべてを知っておられるからです。いいですか？このような存在としてあなたは神の目に映っているのです。神の前にあなたはこのような者だと神が教えてくれているのです。私たちがそのことに気付いていなかったのです。私はこのような者ではない、これは隣のあの人であって、この人であって私はそれに該当しないと信じ込んでいるのです。でも、神は「これはあなたの姿だ」と言われるのです。

「この地上には、善を行い、罪を犯さない正しい人はひとりもないから。」と伝道者の書7：20に書かれています。あなたのことを知っておられる神は「あなたは正しくない。あなたは神の前を正しく生きていない。」と言われます。ローマ3：10-12に「:10 それは、次のように書いてあるとおりです。「義人はいない。ひとりもない。:11 悟りのある人はいない。神を求める人はいない。:12 すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行う人はいない。ひとりもない。」と書かれている通りです。つまり、神の前に正しい人は一人もないのです。

整理してみましょう。なぜ、神は律法を下さったのか？それは、あくまであなたは神の前に罪人であることをあなた自身に悟らせるためです。神はあなたを見て驚いているわけではありません。この人はこんなことをする人だったのか？こんなことを考える人だったのか？と、神があなた見ていろんなことを発見してその都度驚いておられるのか？そうではありません。神はすべてのことをもうご存じなのです。私たちが私たち自身のことを分かっていないのです。私たちは「自分はそんなにひどい人間ではない！」と信じたいのです。そのために、一生懸命自分よりも悪いと思われる人を捜して「あの人よりはましだね」と言うのです。私たちがやっていることは人と自分を比較することです。そうすることによって、自分よりも悪い人がいると自分は気分が良いからです。神が言われることは「あなたがしなければならぬことは全知全能の神があなたをどのようにご覧になっているのかを知ること」です。神はあなたの本当の姿をご覧になっています。あなたの心のすべてのこと、あなたの思いのすべてを知っておられます。ですから、律法はあなたは罪人だということをあなたに悟らせるものであって、救いを得るための手段ではなかったのです。なぜなら、だれも律法を完全に守れる人はいないからです。

ガラテヤ人への手紙3：24をご覧ください。同じパウロが律法についてこんなことを教えています。「こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。」と。「養育係」ということばがあります。私たちはこのことばを聞いても何のことがよく理解できません。どのような人であったのか？説明します。「養育係」とは親に代わって子どもたちを、特に男の子たちを監督するため、訓練するためにギリシャやローマの家庭から雇われた奴隷なのです。本来なら、両親がするはずのことですが、それを奴隷が担ったのです。そういう奴隷を雇ったのです。だれでもよかったわけではありません。彼らはある程度年齢を経ていて、経験や知恵があつて、家族が信頼できるような奴隷だったのです。

この人の役割は、子どもが誘惑や危険に陥らないように、また、学んだことをしっかり実践できるように訓練していくことです。彼らは子どもの生涯に渡ってずっとこの働きを為すという務めをいただいていたのではなく、期限があったのです。子どもが大人になればその働きは自然になくなったのです。子どもの方からするなら、自分の養育係から解放されて自由になることは彼らが願いとすることでした。その日が来るのです。パウロが教えることは、律法とはまさにその養育係を同じだということです。

律法はまずあなたが罪人であることを教えました。そして、あなたは罪に対して無力だと教えます。なぜなら、罪を犯さない人になることはできないからです。どんなに頑張ってもどんなに心を入れ替えても100%聖い人にはなれません。たとえ、今あなたが100%聖い人になったとしても、これまでに犯して来たその罪のさばきをあなた自身は受けなければならない。すでにこれまでの人生において神に対して罪を犯しているから、あなたは間違いなく神のさばきに服するのです。あなたが今日死を迎えたなら、確実にあなたに待っているのは永遠の滅びであり永遠の地獄です。神に対して罪を犯した以上、その報いは当然あなたに訪れるからです。それをあなたの努力ですべて帳消しにすることなどできません。つまり、律法は「あなたは神に背いている。正しい道から外れている。的を外している。」と教え、そして、残念ながら、あなたには救いの希望が全くないことを明らかにしたのです。

なぜなら、神は100%聖く正しい人間を要求するのであって、私たちはそうではなかったし、そういう人にもなれないからです。だから、律法はそのことを教えるとともに、あなたには救い主が必要だということを示したのです。あなたにはできないことだからあなたは助けをもらわなければならないのです。そして、あなたがこの救いに与ったなら、もう律法の役目は終わったのです。ちょうど、養育係がその働きを終えるように…。

ですからパウロは、律法とは目的をもって私たちに与えられたと教えます。本当のあなたを知るために、あなたの霊的状态を知るために、あなたの必要を知るために与えられたのです。神はあなたに対して「あなたは罪人だ」と言われます。なぜなら、神はあなたのすべてをご存じだからです。先に触れたように、神はあなたのことばだけを聞いておられるのではありません。あなたの心に浮かぶあらゆる思いあらゆる考えをご存じです。神があなたを「罪人」と呼ばれるのはあなたを愛しておられるからです。だから、警告しているのです。もし、憎んでいるならそんなことを言う必要はない、さばいたらいいのです。あなたを愛するゆえにあなたに警告を与えます。「必ず、さばきが来る」と。

そして、警告するだけでなく、そのさばきから逃れる道も備えてくださったのです。パウロが言ったように、Iテモ 1:15 「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた」、キリスト・イエスはあなたをその罪から救い出すために来てくださったのです。そして、来てくださっただけでなく、罪のないイエスが罪人のあなたに代わって十字架であなたが受けるはずのさばきを受けてくださった。この犠牲によって、完全で永遠の救いが備えられたのです。この救いは神の子イエスのいのちと引き換えに備えられたのです。皆さん、救いは備えられたのです。

なぜ、あなたはこの救いに背を向け続けるのか？です。どうして、主イエス・キリストご自身がご自分のいのちを犠牲にしてまであなたのために備えてくださったこの完全な救いを拒み続けるのか？です。私たちが心からあなたにお勧めすることは、確かに、これまであなたは神に背を向けて逆らい続けて来た、その罪を悔い改めることです。そして、真の神なるイエス・キリストを信じてこの方に従う決心をなさることです。

「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」「かしら」だと言います。罪人の中でも最も罪深い者だと、パウロはこう締めくくります。皆さん、パウロが語ったこのメッセージは私たちに二つのことを教えます。それをもって今日のメッセージを閉じます。

(1) 「罪人のかしらである私が救われたということは、どんな罪人でも救いに与ることができる」ということ。罪人の中で最も罪深い私が救われたという事実は、あなたにも救いがあるということをお知らせします。ここに希望があるのです。神はあなたを招いておられます。神の前に罪の赦しを求めて出るなら、神はあなたを救ってくださいます。

(2) 「救いに与った者として自分の罪深さを決して忘れてはならない」ということを教えます。救われた私たちひとり一人は自分の罪深さを決して忘れてはならないのです。パウロはここで「私はその罪人のかしらだった」とは言っていません。「罪人のかしらです。」と敢えて現在形を使っています。彼はずっとそのことを思いそのことを忘れることはなかったのです。いったい私は神の前にどのような者だったのか？どのような私を神は救ってくださったのか？そのことを忘れることはなかったのです。私たち信仰者はそれを忘れてはならないのです。そのことをいつも覚えている人は神への感謝を忘れることがないからです。そして、皆さん、神への感謝が私たち信仰者の歩みの原動力です。神への感謝が主への奉仕を生み出していくのです。神への感謝が心からの主への礼拝を生み出していくのです。神への感謝がこの方に早くお会いしたいという、私たち信仰者が持つべき思いを私たちにくださるのです。

忘れていませんか？あなたはどれほど神の前に罪深く救いに値しない者であったか、そして、今もそのような者であるということ、あなたが救いに与ったのは一方的な神の恵みです。感謝していますか？そのことを…。パウロは自分の罪深さをよく理解していました。本当に自分は罪人の中でも最も罪深い最悪な者だと。でも「神が私を救ってくださった」とそれを喜び感謝しながら歩んだのです。

そのような歩みをしたのはパウロだけではありません。皆さんもよくご存じのジョン・ニュートン、あの「アメイジンググレイス」という曲を書いた一人の牧師です。彼がイエス・キリストの福音を聞いて信じて、そして、牧師となったときに、彼は自分の書斎の壁に次のみことばを掲げたと言われます。それは「あなたは、エジプトの地で奴隷であったあなたを、あなたの神、【主】が贖い出されたことを覚えていなさい。」という申命記 15 : 15 のみことばです。このみことばを大きく書いてそれを壁に貼っていたのです。イスラエルの民に対して神はこのように言われたのです。でも、救いに与った私たちみなは、こんな私を神は救ってくださったとそのことを覚えながら生きていきます。まさに、パウロと同じでした。そして、ジョン・ニュートンは自分の墓石に次のような碑文を記しました。「ジョン・ニュートン、牧師、かつては異教徒であり放蕩者であり、アフリカの奴隷たちのしもべであった。しかし、私たちの主である救い主イエス・キリストのあわれみによって滅ぼされずに生かされ、神との関係が修復され、罪が赦され、そして、長年に亘って滅ぼそうと努力して来た信仰を宣べ伝えるために任命された。」と、これが彼自身が墓石に書いたメッセージです。

救われたことを忘れなかった、救われたことを感謝していた、そうでなければ私たちはイエスのご降誕を心から喜ぶ者になれません。世の人々は全く感謝することなく、クリスマスソングを歌います。神はそんな虚しい歌をお喜びにはなりません。では、問題は私たちクリスチャンはどうか？です。私たちはいろいろな讃美歌を賛美します。確かに、感謝をもって賛美するでしょう。でも、パウロが言ったように、ニュートンが言ったように、「神さま、本当にあなたがこの世に来てくださったこと、十字架で贖いを成し遂げてくださったこと、そして、こんなどうしようもない罪人のかしらである私を救ってくださったことを感謝します。あなたに仕えていきたい、あなたのすばらしさを伝える者としてください。こうして、救ってくださり生かしてくださり用いてくださることを感謝します。」と。あなたは心からこのことを感謝しているなら、私たちの主は喜んでくださっています。

このクリスマスに、救われておられない方は今一度イエス・キリストがこの世に来られた目的を考え、そして、この主を心から受け入れて主を心から称える者に変えられることです。そして、救われているなら、心から感謝する者に今一度変えていただきたいという願いをもって祈りをもって、主の前に立つことです。「イエス・キリストはあなたを救うために来てくださった」、これはまことであり、そのまま受け入れる価値のあるものだと言われました。このクリスマス、ひとり一人の信仰が新たにされることを期待します。